

原田種成著「貞観政要」(上)明治書院 1978年5月20日刊を読む

貞観政要 解題 一書名と内容一

1. 『貞観政要』は、唐の太宗の政治に関する言行を、太宗の没後五十年ぐらいのころ、呉兢ごきょうという歴史家が、十卷四十篇に編録した書である。唐の太宗は、中国史上に傑出した大政治家であったばかりでなく、世界史上においても、有数な大政治家の一人である。太宗は、西欧が暗黒時代であった西暦六百年代に、漢以来五百年に余る混乱を重ねていた中国を統一して、道徳的文化国家である唐朝三百年の基礎を築いた。唐の盛時は、中国固有の文化が開化しただけではなく、雄大な世界的帝国として、広く外来文化を摂取同化し、国際的綜合文化を形成し、東洋の諸国の文化に、広汎な影響を与え、特に、わが奈良・平安文化の開化は、遣唐使や留学生を派遣して摂取した、唐の制度・学問・芸術に負うところが極めて多い。
2. 貞観じょうがんとは、その太宗の年号であり(六二七-六四九)、後世、太宗の治世を「貞観の治」といい、理想的な道徳政治の世として賛美している。
3. 唐の太宗は約二十四年間、皇帝の位にあったが、唐の国家の基礎は、この間に確立されたと言っても過言ではない。太宗は武勇にすぐれ決断力に富み、全く聡明神武という賛辞のと通りの君主であった。その隋末の群雄と戦ってそれらを平定した兵略が卓越していたことはいうまでもないが、帝位に即位した後は、政治の基礎を儒教道徳の上に置き、自信を厳しく律して質素な生活を送り、幾多の人材を任用し、房玄齡ぼうげんれい・杜如晦とじょかいを宰相として政務を綜理させ、魏徵きちゆう・王珪おうけいを諫議大夫に任じて、天子の過失を諫め、政治の得失について意見を述べさせ、軍将には李勣りせき・李靖りせいらの名将を用いた。とくに魏徵の忌憚ない諫言を納れ用いたのは、君主として極めて立派な態度であった。
4. 太宗は神仙の説を虚妄であるとし、秦の始皇や漢の武帝が、これを信じたのを非とし、専ら儒教の精神をもって治国の方針とし、学業優秀の上に政治に本質をよく知る者を重用した。だから、即位の初めに、隋の臣下で、弑逆しぎやくに関係したものを罪して、君臣の義を明らかにしたばかりでなく、宮中の弘文殿に二十余万卷の書籍を集め、虞世南ぐせいなんらに弘文館学士を兼務させ、交替で宿直して、歴史上の人物や現代の政治について討論させ、学者に命じて『五経正義』を作らして学校の教科の標準とし(当時は印刷術がまだ起こらず、書籍はすべて写本であったから、儒教の経典である五経にすら、筆写のための誤脱が多かった)、かつ、人心しゅうらんの収攬に努め、窮乏を救い、無実の罪を明らかにし、国家のために一身を犠牲にした者を旌表することを怠らなかつた。また、太宗が宮女三千を放帰させたということも有名な話である。
5. 太宗が政治家として傑出しているのは、天才を発見し、適材を適所において、才能をよく發揮させたことであり、それらの名臣の直言を納れ、普通の君主では到底聴き納れることはできまいと思われるような苦言も、よく納れ用いて、常に最善の君主であらねばならぬと、努力してやまなかつたところにある。そして、創業と守成とを一人の身に兼ね享けたものは、歴史の皇帝にその類を見ず、創業の功臣を一人も殺さなかつたのは唐の太宗の最も偉いところである。

6. 『貞観政要』は、そうした太宗と群臣との問答を収録して四十篇に分類した書である。

P1 ~ 2

[コメント]

現代のリーダーに最も欠けるリーダーシップの本質、人の使い方の本質を示した書。唐の繁栄を築いた太宗の基本的な考え方を示した本書から学ぶことは多い。

— 2012年2月24日 林 明夫記 —